余暇のひととき

文化協会より

俳句

＜渋柿　宇和島支部＞

自ら意気を新たに年の酒　渡辺　孤鷲
日の本は日の丸掲げ初日の出　大野　直続
平和のほか願ふことなし初日の出　上甲　正志
元朝や新たな希ひ老いの夢　平野　青流
段畑の段くきやかに初明り　佐々木　皓一
またひとつ歳を乗りつぐ初湯かな　財前　渓子
大漁旗はためく浦や初明り　中山　孝司
雪を踏む音を踏みゆく宮参り　勇　八郎
蒼天の光賜る玉の春　亀井　幸子
日捲りの健やかにあれ新暦　善家　一二三
成人の吾子も春着の輪の中に　酒井　けい子
土手に立つ家族の語らひ初日受く　林　妙子
いつも見て今朝の海山初景色　赤松　彌介

＜萌の会＞

冬晴や鳩にも分けてお弁当　今井　久美子
人込みの一人となりて初詣　今城　妙子
リハビリの夫の背に燃え冬茜　櫻井　香
甘栗のよく売れてゐる梅見かな　櫻井　良子
渓谷の宿のもてなし大暖炉　宮崎　道子
湯気さかんなる大薬缶梅見茶屋　森田　たみ

＜柿の実句会＞

裸木のぶつきらぼうの力瘤　上甲　里美
初太鼓一片の雪解きほぐす　友岡　文子
身奇麗に老いんと思ふ福寿草　松森　敬子

恒例や夫手作りの松飾り　宮本　玉江
初霜の手押し車を拭きにけり　山口　陽子
思ひ切り冬の空気を吸ひし午後　山本　敦子
年迎ふ香炉の灰をふるひけり　平岡　千代子

川柳

＜川柳鹿の子吟社＞

宝くじ当てて乗りたいななつ星　岩根　長江
街ならなあ病院に人多いこと　男武　志津江
痩せてきた脳取り囲むカタカナ語　片山　辰巳
ためらいの長さチャンスは通り過ぎ　古本　鈴代
記念にと手塩にかけた庭の松　杉田　温州
振り返る笑顔があって自然体　中川　まさ子
しみじみと善意に感謝遍路宿　程内　玄雄
祝米寿バッジの顔に取り巻かれ　森　ひさし

短歌

＜二名短歌会＞

二度咲きの花やや小さしと思へども枝とふ枝にあふれて匂ふ　吉田　信保
秋日和なにげなく佇つ庭先を白き秋蝶高くとびゆく　善家　キクヱ
泡立草休耕田を黄にそめし畦に五位鷺立ちて動かず　善家　聖子
「百姓と云へば昔の言葉よ」と友との会話つきることなし　善家　博子
老い一人住むを思いて孫ひ孫電話で明るく声かけくれる　武田　あきの
夏休みに蜻蛉とり蝉を取りし孫歯医者となりて三人の父に　武田　キミ子
七五三晴着姿の幼子は紅挿す口を窄めて待てり　安波　五月
人影もまばらな町の秋祭り神輿と牛鬼雨の中ゆく　髙山　幸子